

教訓を未来につなぐ

国際目標を、地域に・ローカルアジェンダ21からの学び

国際目標は、地域にどのように役立てられるのでしょうか。1992年の地球サミットで採択された「アジェンダ21」の地域版を、まちづくりに活かした事例から、ヒントを探ります。

持続可能な社会を、地域から

1992年にブラジルのリオデジャネイロで開催された環境と開発に関する国連会議(地球サミット)には、世界各国の政府代表の他、NGO、女性、青年と子ども、企業、自治体、労働者、科学者、農業者、先住民といった多様な人々(メジャーグループ)が参加し、持続可能な未来を話し合いました。この会議で採択された「アジェンダ21」は、条約のような法的拘束力はありませんが、各国が持続可能な社会をつくる上での重要な指針とされました。この国際合意への取り組みを促進するため、1993年に、日本でも国連に国別行動計画を提出しました。アジェンダ21には、課題の解決のためには、国家ばかりではなく、地方自治体の取り組みが大事だと記されています。これを受けて、環境庁(当時)は自治体が「ローカルアジェンダ21」をつくるための指針をつくり、公表しました。



開催に合わせ市民社会が開催した
ピープルス・サミット

より広く、捉えて行こう!

アジェンダ21に記された方針や精神は日本の環境基本計画にも反映され、個別の政策にも影響を与えました。自治体では神奈川県が93年に初めてローカルアジェンダ21を策定し、2003年3月までに47都道府県、12政令指定都市、318市区町村が策定しています。国際目標は、地域の活動を活性化することに結びつきます。SDGs時代のチャレンジは、持続可能性をより広く捉えて、分野横断的な取り組みをいかに促進していくかです。環境政策だけでなく、産業振興や就労、教育や人権など、多様な問題に取り組む人たちが、「希望ある地域の未来」をともにつくっていくために、つながり合う場をつくっていく。そんな動きが、各地で生まれていくことが期待されます。



市民の声を、地域の未来に活かしていく

未来を紡ぐ、ヒントを探せ!

SDGsを活用して、持続可能な地域をつくるためのポイントとはなんでしょう? 「地域づくり×SDGs」に取り組む人々から得たキーワードを紹介します。

ゆるやかな、重なり合いをつくろう

社会課題は、それぞれが関連していて、つながりあっている。それはわかるけれど、全部を把握するなんて無理。だからこそ、活動する人たちがつながり合ってくことで、多くの重なり・接点が生まれる生態系をつくろう!



ことなる現場をつなぐ「通訳」を育てよう

アルファベットやカタカナ、行政・企業・NPOなどに特有の「業界用語」ばかりでは、多様な人々が交わり合う場がつかれない。お互いの背景を知り、互いが言おうとしていることを受け止めるための「言葉の紐解き」ができる「通訳者」を育てていこう!



積極的に「アウェイ」に出向こう

普段慣れ親しんだ仲間と話しているだけではわからないことはたくさんある。知らないことに気づいたり、自分たちが持っていた秘めたる可能性に気づいたり…。交わることから、生まれる可能性は無限大。異分野の人たちと、積極的に交わり合ってみよう!



暮らしの中に「現場」を見つけよう

国際目標というと、壮大過ぎる気がするけれど、自分の暮らしの中にも、新しい未来につながるアクションがきっと見つかるはず。隣の人と言葉を交わしてみることで、買い物や旅行、地域の集会…。いろいろな場を「変革」の現場と意識して、行動を具体化してみよう。

